

埼玉県下中学生における有機溶剤乱用に関する研究

シマネ タクヤ^{*,2*} ミサゴチ ツル^{*,3*}
嶋根 卓也^{*,2*} 三砂ちづる^{*,3*}

目的 本研究は、中学生における有機溶剤乱用の実態を把握し、乱用者に共通した生活背景を明らかにした上で、有機溶剤乱用への“gateway drug”（ある薬物 A の使用がより依存性、毒性の強い薬物 B の使用に結びつくという考え方）としての喫煙および飲酒を検討することを目的とした。

方法 埼玉県内 3 校の中学校の生徒を対象に、倫理面に配慮しながら、質問紙調査を無記名自記式にて行い、計 2,049 人（有効回答率 93.2%）から質問紙を回収した。有機溶剤乱用経験の有無により、対象者を 2 群に分類し、常習的な喫煙・飲酒行動が有機溶剤乱用への“gateway drug”となっているかを検討するために、①有機溶剤と喫煙および飲酒との関連性、②使用順序、③多変量解析による検討、の 3 つの側面から解析を行った。

結果 ①有機溶剤乱用経験率は、全体の 1.1% であった。経験率は女子よりも男子の方が多く（男子の 1.9%、女子の 0.3%）、学年が上がるにつれて増加する傾向がみられた（1 年 0.6%、2 年 0.8%、3 年 2.1%）。②単変量解析において、有機溶剤乱用と喫煙および飲酒の間には関連がみられた。③使用開始年齢不明者の者が多く、有機溶剤、喫煙、飲酒の使用順序を把握することはできなかったため“gateway drug”仮説は検証できなかった。④多変量解析の結果、有機溶剤乱用へのリスクを高める要因として、常習的な喫煙行動、家族から喫煙を勧められた経験がある、夕食を一人で食べる頻度が高い、乱用現場を目撃した経験がある、友人に乱用者がいる、などが挙げられた。⑤飲酒と有機溶剤乱用との関連は、多変量解析後にはみられなくなった。

結論 中学生の間にも有機溶剤乱用は依然として広がっており、中学 1 年生においても乱用経験者がみられることから、より早期での予防教育の必要性を再認識した。また、有機溶剤乱用経験者は、仲間からの影響を強く受けていることや、家族とのコミュニケーションが乏しい状態にあることが示唆され、「仲間からの誘いをいかに断るか」といったライフスキルトレーニングや家族関係を視野に入れた社会的心理的なケアの充実が今後有効であると考えられた。“gateway drug”仮説を検証するための有機溶剤・喫煙・飲酒の使用順序は明らかにできなかったものの、常習的な喫煙行動は、有機溶剤乱用と強く結び付いていると思われる。一方、飲酒と有機溶剤乱用との関連は、喫煙が交絡因子になっていると予想され、飲酒単独では“gateway drug”とはならないと示唆された。

Key words : 薬物乱用, gateway drug, 有機溶剤, 喫煙, 飲酒, 中学生

* 国立保健医療科学院疫学部

2* 順天堂大学医学部衛生学教室

3* 津田塾大学学芸学部

連絡先：〒113-8421 東京都文京区本郷 2-1-1

順天堂大学医学部衛生学 嶋根卓也